

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

『楚辭補注』 譯注稿(三十四)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000222

『楚辭補注』譯注稿（三十四）

楚辭卷第四

九章章句第四

哀郢

〔本文〕

- (1) 皇天之不純命兮 皇天の命を純らにせざる
(2) 何百姓之震愆 何ぞ百姓の震愆する
(3) 民離散而相失兮 民は離散して相失ひ
(4) 方仲春而東遷 仲春に方りて東遷す
(5) 去故鄉而就遠兮 故郷を去りて遠きに就き
(6) 遵江夏以流亡 江夏に遵ひて以て流亡す
(7) 出國門而軫懷兮 國門を出でて懷ひを軫ましめ
(8) 甲之鼃吾以行 甲の鼃 吾以て行く
(9) 發郢都而去閭兮 郢都を發して閭を去り
(10) 罔荒忽其焉極 罔として荒忽として其れ焉くんぞ極まらん

(11) 楫齊揚以容與兮 楫齊かしく揚げて以て容與し

(12) 哀見君而不再得 君に見えんとして再びは得ざらんことを哀しむ

〔通釋〕

天命が正しく行われず、災害が続き、なんと人民が天のとがめに対してふるえおそれることか。民は離散して親族と別れ別れとなり、この春のもなかにあたつて東に移り行く。わたくしもこの中であつて、故郷を離れて遠い旅路にのほり、揚子江と夏水の流れに沿つてさすらいのがれて行く。都の門を出でては心を痛ませ、甲の日の朝、わたくしは出發した。郢の都を出發して故郷をあとにするとき、心はうつろに愁いはきわまりない。舟人たちは、櫂をそろえておもむろに漕ぎ出すが、わたくしは、君にお目にかかることも二度とはかなわないのを悲しむのである。

〔洪興祖補注〕

(1) 〈皇天之不純命兮〉

德美大稱皇天、以興君也。

〔訓讀文〕

德の美大なるを皇天と稱し、以て君を興するなり。

(2) 〈何百姓之震愆〉

震、動也。愆、過也。言皇天不純一其施、則萬物夭傷、人君不純一其政、則百姓震動以觸罪也。

〔訓讀文〕

震は、動くなり。愆は、過なり。言ふところは、皇天 其の施を純一にせざれば、則ち萬物夭傷し、人君 其の政を純一にせざれば、則ち百姓震動して以て罪に觸るるなり。

〔語釋〕

○萬物夭傷——すべてのものが若くして死ぬこと。○百姓震動以觸罪也——すべての民が震えおののいて、天の咎めを蒙ること。

〔3〕(4) 〈民離散而相失兮 方仲春而東遷〉

仲春、二月也。刑徳合會嫁娶之時。言懷王不明、信用讒言、而放逐己、正以仲春陰陽會時、徙我東行、遂與室家相失也。一無「方」字。

〔訓讀文〕

仲春は、二月なり。刑徳合會し嫁娶の時なり。言ふところは、懷王 不明にして、讒言を信用して、己れを放逐して、正に仲春の陰陽會する時を以て、我を徙して東行せしめ、遂に室家と相失するなり。一に「方」の字無し。

〔語釋〕

○刑徳合會嫁娶之時——刑は陰、徳は陽。陰陽が整い、婚姻のときでもある。○遂與室家相失也——最終的に家族とお互いを見失うこと。

(5) (6) (去故郷而就遠兮 遵江夏以流亡)

導、循也。江夏、水名也。言己東行、循江夏之水而遂流亡、無還郷之期也。

〔補曰〕前漢有江夏郡、應劭曰、「沔水自江別、至南郡華容爲夏水、過郡入江、故曰江夏。」水經云、「夏水出江津、於江陵縣東南。」注云、「江津、豫章口、東會中夏口、是夏水之首、江之汜也。所謂『過夏首而西浮、顧龍門而不見』也。」又云、「又東至江夏雲杜縣入于沔。」注云、「應劭曰、江別入沔、爲夏水源。夫『夏』之爲名、始於分江、冬竭夏流、故納厥稱。既有中夏之目、亦苞大夏之名矣。當其決入之所土、謂之賭口焉。鄭玄注尚書『滄浪之水』言、『今謂之夏水。』劉澄之著水初山川記云、『夏水古文以爲滄浪、漁父所歌也。』因此言之、水應由沔。今按、夏水是江流沔、非沔入夏。假使沔注夏、其勢西南、非尚書『又東』文。余亦以爲非也。自賭口下沔水、兼通夏首、而會於江、謂之夏汭。故春秋傳、『吳伐楚、沈尹戌奔命於夏汭也。』杜預曰、『漢水曲入江、即夏口矣。』

〔訓讀文〕

遵は、循ふなり。江・夏は、水の名なり。言ふところは、己れ東に行き、江・夏の水に循ひて遂に流亡し、還郷の期無きなり。

〔補に曰く〕『前漢』に、江夏郡有り。應劭曰く、「沔水は江より別れて、南郡の華容に至りて夏水と爲り、郡を過ぎて江に入る。故に江夏と曰ふ。」と。『水經』に云ふ、「夏水は江津に出で、江陵縣の東南に於いてす。」と。注に云ふ、「江津の豫章口、東して中夏口に會す。是れ夏水之首、江の汜なり。所謂『夏首を過ぎて西に浮かび、龍門を顧みれども見えざるなり』」と。又云ふ、「又東して江夏雲杜縣に至りて沔に入る。」と。注に云ふ、「應劭曰はく、江別れて沔に入り、夏水の源と爲る。夫の『夏』之を名と爲し、始めて江を分かつに於いて、冬竭き夏流る、故に厥の稱を納る。既に中夏の目有るも、亦た大夏の名を苞ぬ。其の決入の所に當たりて、土之を賭口と謂ふ。鄭玄『尚書』の『滄浪の水』に注して言ふ、『今之を夏水と謂ふ。』と。劉澄之著水初山川記に云ふ、『夏水は古文以て滄浪と爲す。漁父の歌ふ所なり。』と。此に因りて之を言へば、水應に沔に由るべし。今、按ずるに、夏水は是れ江、沔に流れて、沔、夏に入るに非ず。假し沔をして夏に注がしめば、其の

勢ひ西南す。『尚書』の『又東す』の文を非とす。余も亦た以て非と爲すなり。賭口自り沔水に下り、兼ねて夏の首に通じ、而して江に會す。之を夏沔かぜいと謂ふ。故に『春秋傳』に、『吳、楚を伐ちしとき、沈尹戍、夏沔に奔命するなり。』と。杜預曰はく、『漢水曲りて江に入る。即ち夏口なり。』と。」

〔語釋〕

○前漢——『漢書』（點校本二十四史）卷二十八上「地理志第八上」に同文あり。○應劭曰——『漢書』（點校本二十四史）卷二十八上「地理志第八上」唐・顏師古注本に同文あり。○水經注——『水經注』（水經注校證）卷三十二「夏水」に同文あり。○注云——『水經注』（水經注校證）卷三十二「夏水」に同文あり。○又云——『水經注』（水經注校證）卷三十二「夏水」に同文あり。○注云——『水經注』（水經注校證）卷三十二「夏水」に「應劭『十三州記』に曰く、江別れて沔に入りて夏の水源と爲る。（應劭『十三州記』曰、江別入沔爲夏水源。）とある。○鄭玄注尚書——『尚書正義』（十三經注疏）卷第六「夏書」「禹貢」に同文あり。○劉澄之著永初山川記云——未詳。○春秋傳——『春秋左傳正義』（十三經注疏）卷四十二「昭公四年」に「吳伐楚入棘櫟麻、以報朱方之役、楚沈尹射奔命於夏沔」とある。○杜預曰——『春秋經傳集解』卷二十二「昭公四年」に同文あり。

〔7〕〈出國門而軫懷兮〉

軫、痛也。懷、思也。

〔訓讀文〕

軫は、痛むなり。懷は、思ふなり。

(8) 〈甲之鼃吾以行〉

甲、日也。鼃、旦也。屈原放出郢門、心痛而思、始去正以甲日之旦而行。紀時日清明者、刺君不聰明也。鼃、一作「晁」。
〔補曰〕鼃・晁、並讀爲「朝暮」之朝。馮衍賦云、「甲子之朝兮、泪吾西征。」注云、「君子舉事尚早、故以朝言也。」

〔訓讀文〕

甲は、日なり。鼃は、旦なり。屈原放たれて郢門を出でて、心痛みて思ふ。始め去るや、正に甲日の旦を以て行く。時日の清明なる者を紀すは、君の聰明ならざるを刺るなり。鼃は、一に「晁」に作る。

〔補に曰く〕鼃・晁は、並びに讀んで「朝暮」の朝と爲す。馮衍の賦に云ふ、「甲子の朝、泪として吾西に征く。」と。注に云ふ、「君子の舉事尚ほ早し。故に朝を以て言ふなり。」と。

〔語釋〕

○馮衍賦云——『後漢書』（點校本二十四史）卷二十八下「馮衍傳下第十八下」に同文あり。○注云——未詳。

(9) (10) 〈發郢都而去閭兮 悵荒忽其焉極〉

言已始發郢、去我閭里、愁思荒忽、安有窮極之時。一無「都」字。一本「荒」上有「悵」字。其、一作「之」。

〔補曰〕前漢、南郡江陵縣、故楚郢都。「楚文王自丹陽徙此。後九世平王城之。後十世秦拔我郢、徙東郢。」閭、里門也。荒忽、見九歌。

〔訓讀文〕

言ふところは、己れ始め郢を發して、我が閭里を去るや、愁思荒忽として、安くんぞ窮極の時有らんや。一に「都」の字無し。一本「荒」の上に「悵」の字有り。「其」は、一に「之」に作る。

〔補に曰く〕『前漢』に、「南郡の江陵縣」と。故の楚の郢都なり。「楚の文王、丹陽より此に徙る。後九世の平王之に城く。後十世、秦、我が郢を抜き、東郢に徙る。」閭は、里門なり。荒忽は、「九歌」に見ゆ。

〔語釋〕

○前漢——『史記』（點校本二十四史）卷四十「楚世家第十」の杜預注に「國都に都す、今の南郡江陵縣北紀南城は是れなり。（國都於郢、今南郡江陵縣北紀南城是也。）」とある。○見九歌——『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷第二「九歌章句第二」「湘夫人」に「荒忽として遠く望めば流水の潺湲たるを觀る（荒忽兮遠望 觀流水兮潺湲）」とある。『楚辭補注』譯注稿（十七）（『國學院中國學會報』第五十輯所収）に既出。

〔11〕〈楫齊揚以容與兮〉

楫、船櫂也。齊、同也。揚、舉也。

〔補曰〕楫音接。

〔訓讀文〕

楫は、船の櫂なり。齊は、同なり。揚は、舉ぐるなり。

〔補に曰く〕楫、音は接。

〔12〕〈哀見君而不再得〉

言已去乘船、士卒齊舉楫櫂、低徊容與、咸有還意。自傷卒去、而不得再事於君也。

〔訓讀文〕

言ふころは、己れ去りて船に乗り、士卒 齊しく楫權を擧げ、低徊容與し、咸みな還意有り。自ら傷むらくは、卒に去りて、再び君に事ふるを得ざることを。

〔語釋〕

○士卒 齊舉楫權——舟人が權の動きを揃えること。○低徊容與——船をゆっくりと進めるさま。

〔本文〕

- (13) 望長楸而太息兮 長楸ちやうしゆうを望みて太息し
- (14) 涕淫淫其若霰 涕た淫淫として其れ霰さんの若し
- (15) 過夏首而西浮兮 夏首を過ぎて西に浮び
- (16) 顧龍門而不見 龍門を顧みるも見えず
- (17) 心嬋媛而傷懷兮 心せんえん嬋媛として傷み懷ひ
- (18) 眇不知其所蹠 眇べうとして其の蹠む所を知らず
- (19) 順風波以從流兮 風波に順ひ以て從流し
- (20) 焉洋洋而爲客 焉こに洋洋として客と爲る
- (21) 凌陽侯之汜濫兮 陽侯の汜濫たるに凌り
- (22) 忽翱翔之焉薄 忽として翱翔して焉いづくにか薄ととまらん
- (23) 心絀結而不解兮 心かくけつ絀結として解けず
- (24) 思蹇產而不釋 思けんさんひ蹇產として釋けず

(25) 將運舟而下浮兮 將に舟を運めぐるして下に浮はんとす

(26) 上洞庭而下江 洞庭を上り江を下る

(27) 去終古之所居兮 終古の居る所を去りて

(28) 今逍遙而來東 今逍遙として東に來る

〔通釋〕

なつかしい都の梓の大木を望み見てためいきをつき、涙ははらはらとあられのように流れそそぐ。夏水の川口を通過して西に流れ行けば、竜門を顧みても、もう見えない。心ひかれて傷み懐い、前途は遠く遙かで、どこに行ったらよいかわからない。風波に順い流れにまかせて、かくは、行くえ定めぬ旅人となつたのである。みなぎりあふれる大波に乗り、忽然と鳥のごとく飛びながら、どこに至りとどまろうとするのか。心はひどくこだわつてほぐれず、思いは固くゆきつまつて伸びない。船を漕ぎ進め流れを下ろそうとして、洞庭湖の入り口の処を経て、揚子江を下る。先祖代々住み慣れた土地を離れて、わたしはさまよいつつ、東へとやつて來た。

〔洪興祖補注〕

(13) 〈望長楸而太息兮〉

長楸、大梓。太、一作歎。

〔補曰〕楸音秋。

〔訓讀文〕

長楸は、大梓。太は、一に歎に作る。

〔補に曰く〕 楸音は秋。

〔14〕 〈涕淫淫其若霰〉

淫淫、流貌也。言已顧望楚都、見其大道長樹、悲而太息、涕下淫淫、如雨霰也。

〔訓讀文〕

淫淫は、流るる貌なり。言ふところは、己れ楚の都を顧望して、其の大道の長樹を見て、悲しみて太息し、涕下りて淫淫たること、霰の雨あめふるが如きなり。

〔語釋〕

○涕下淫淫、如雨霰也——悲しみて涙が流れるさまがあらがふるようであるという意。

〔15〕 〈過夏首而西浮兮〉

夏首、夏水口也。船獨流爲浮也。

〔補曰〕 荀子曰、夏首之南有人焉。

〔訓讀文〕

夏首は、夏水の口なり。船の獨り流るるを浮と爲すなり。

〔補に曰く〕 荀子に曰く、夏首の南に人有りと。

〔語釋〕

○夏水口——夏水は今の長夏河であり、大江に注ぐ。夏水口はその川口である。○荀子——『荀子集解』（新編諸子集成）卷十五「解蔽篇」に同文あり。

〔16〕〈顧龍門而不見〉

龍門、楚東門也。言己從西浮而東行、過夏水之口、望楚東門、蔽而不見、自傷日以遠也。

〔補曰〕水經云、龍門、即郢城之東門。又、伍端休江陵記云、南關三門、其一龍門、一名修門。修門、見招魂。

〔訓讀文〕

龍門は、楚の東門なり。言ふところは、己れ西従り浮びて東行し、夏水の口を過ぎて、楚の東門を望むも、蔽はれて見えず、自ら日に以て遠ざかるを傷むなり。

〔補に曰く〕水經に云はく、龍門は、即ち郢城の東門なりと。又、伍端休江陵記に云はく、南關の三門は、其の一は名は龍門、一は名は修門。修門は、招魂に見ゆ、と。

〔語釋〕

○水經——『水經注』卷三十二「夏水」に同文あり。○伍端休江陵記——『楚辭章句疏證』（上海古籍出版社）には「其の引く江陵記は、今佚す、但だ『太平寰宇記』卷一四六山南東道五荊州の引くに存するのみ（其引江陵記、今佚、但存『太平寰宇記』卷一四六山南東道五荊州引）」とある。○見招魂——『楚辭』「招魂」に「魂よ歸り來たり、修門より入れ（魂兮歸來、入修門些）」とあり、その『補注』では「修門は、已に九章の「龍門」注の中に見ゆ（修門、已見九章「龍門」注中）」とある。

(17) 〈心嬋媛而傷懷兮〉

嬋媛、猶牽引也。

〔訓讀文〕

嬋媛は、猶ほ牽引のごときなり。

〔語釋〕

○牽引——ここでは心が引きつけられるという意。

(18) 〈眇不知其所蹠〉

眇、猶遠也。蹠、踐也。言己顧視龍門不見、則心中牽引而痛、遠視眇然、足不知當所踐蹠也。其、一作余。一無其字。文苑作所它。

〔補曰〕蹠音隻。

〔訓讀文〕

眇は、猶ほ遠きのごときなり。蹠は、踐むなり。言ふところは、己れ龍門を顧視するも見えざれば、則ち心中牽引せられて痛み、遠く視れば眇然として、足の當に踐蹠する所を知らざるなり。其は、一に余に作る。一に其の字無し。文苑は所它に作る。

〔補に曰く〕蹠音は隻、と。

〔語釋〕

○眇然——はるか遠いさま。○文苑——未詳。

(19) (20) 〈順風波以從流兮 焉洋洋而爲客〉

洋洋、無所歸貌也。言已憂不知所踐、則聽船順風、遂洋洋遠客、而無所歸也。

〔補曰〕洋洋、水盛貌。焉、讀如且焉止息之焉。

〔訓讀文〕

洋洋は、歸する所無き貌なり。言ふところは、己れ憂へて踐む所を知らざれば、則ち船に聽しひて風に順ひ、遂に洋洋たる遠客にして、歸する所無きなり。

〔補に曰く〕洋洋は、水の盛んなる貌なり。焉は、讀むこと且焉止息の焉の如しと。

〔語釋〕

○遠客——遠客は遠国の旅人の意。『章句』は「洋洋は、歸る所無き貌」としているため、ここでは、行くえなくさまよう旅人となったとする。○讀如且焉止息之焉——助辭のここにとりいう意。

(21) 〈凌陽侯之汎濫兮〉

凌、乗也。陽侯、大波之神。濫、一作瀧。

〔補曰〕戰國策云、塞漏舟而輕陽侯之波、則舟覆矣。淮南云、武王伐紂、渡于孟津、陽侯之波、逆流而擊。注云、陽侯、陵陽國侯也。其國近水、溺死於水。其神龍爲大波、有所傷害、因謂之陽侯之波也。應劭曰、陽侯、古之諸侯。有罪、自投江、其神爲大波。汎、乎梵切。

〔訓讀文〕

凌は、乗るなり。陽侯は、大波の神なり。濫は、一に瀆に作る。

〔補に曰く〕 戰國策に云く、漏舟を塞ぎて陽侯の波を輕んずれば、則ち舟覆らんと。淮南に云く、武王紂を伐ち、孟津に渡るに、陽侯の波、逆流して撃つと。注に云く、陽侯は、陵陽國侯なり。其の國水に近く、水に溺死す。其の神龍大波を爲して、傷害する所有り、因りて之を陽侯の波と謂ふなりと。應劭曰く、陽侯は、古の諸侯なり。罪有りて、自ら江に投し、其の神は大波を爲すと。汜は、孚梵の切、と。

〔語釋〕

○陽侯——水神の名。または波のことを言い、晋の陽陵国の君が溺死して水神となり、常に風波を興して船を覆すという伝説による。以下で引かれる文献及び注はその説明。○戰國策——『戰國策校注』卷二十七「韓策二」「謂公叔曰乘舟」に同文あり。○淮南——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷六「覽冥訓」に「武王の紂を伐つや、孟津に渡り、陽侯の波、逆流して撃ち、疾風晦冥して、人馬相ひ見えす（武王伐紂、渡于孟津、陽侯之波、逆流而擊、疾風晦冥、人馬不相見）」とある。○注云——前に示した『淮南子』本文の高誘の注に同文あり。○應劭曰——『漢書』（點校本二十四史）卷八十七上、揚雄伝に引かれる「反離騷」の「陵陽侯之素波兮」の顔師古注所引の應劭注に同文あり。

〔22〕（忽翱翔之焉薄）

薄、止也。言已遂復乘大波而遊、忽然無所止薄也。之、一作而、一作兮。

〔訓讀文〕

薄は、止なり。言ふところは、己れ遂に復た大波に乗りて遊び、忽然として止薄する所無し。之は、一に而に作り、一に兮に作る。

〔語釋〕

○止薄——とどまり寄り付く。

(23) 〈心絳結而不解兮〉

絳、懸。

〔補曰〕絳、礙也。音畫。

〔訓讀文〕

絳は、懸さまたぐるなり。

〔補に曰く〕絳は、礙なり。音は畫、と。

〔語釋〕

○絳結——『章句』は絳は懸とし、『補注』は「絳は、礙」としている。兩者とも妨げを受けるという意であり、ここでは心がふさがるとうという意である。

(24) 〈思蹇産而不釋〉

蹇産、詰屈也。言已乗船踏波、愁而恐懼、則心肝縣結、思念詰屈、而不可解釋也。

〔補曰〕山曲曰巉巖。義與此同。

〔訓讀文〕

蹇産は、詰屈なり。言ふところは、己れ船に乗りて踏波し、愁へて恐懼すれば、則ち心肝縣結、思念詰屈し、解釋すべか

らざるなり。

〔補に曰く〕山の曲がるを巉嶮と曰ふ。義此れと同じ、と。

〔語釋〕

○詰屈——かがまつてのびないさま。○心肝縣結——心がふさがるさま。○思念詰屈——思いがかがまつてのびないさま。

○巉嶮——山の阿。『補注』では曲がつたさまを示すことから、蹇産と同義としている。

(25) 〈將運舟而下浮兮〉
運、回也。

〔訓讀文〕

運は、回めぐらすなり。

(26) 〈上洞庭而下江〉
言已憂愁、身不能安處也。

〔訓讀文〕

言ふところは、己れ憂愁して、身の安んずる能はざる處なり。

(27) 〈去終古之所居兮〉
遠離先祖之宅舍也。

〔訓讀文〕

遠く先祖の宅舎を離るるなり。

〔語釋〕

○先祖之宅舎——先祖代々住んでいた楚の都である郢のこと。

(28) 〈今逍遙而來東〉

遂行遊戯、涉江湖也。

〔訓讀文〕

遂に行きて遊戯し、江湖を渉るなり。

〔語釋〕

○江湖——ここでは揚子江と洞庭湖のことを指す。

〔本文〕

(29) 羌靈寃之欲歸兮

羌靈寃あられいこんの歸らんと欲する

(30) 何須臾而忘反

何ぞ須臾も反るを忘れん

(31) 背夏浦而西思兮

夏浦を背にして西思し

(32) 哀故都之日遠

故都の日に遠さかるを哀しむ

- (33) 登大墳以遠望兮 大墳に登りて以て遠く望み
(34) 聊以舒吾憂心 聊しほく以て吾が憂心を舒ぶ
(35) 哀州土之平樂兮 州土の平樂を哀しみ
(36) 悲江介之遺風 江介の遺風を悲しむ
(37) 當陵陽之焉至兮 陵陽に當りて焉くにか至らん
(38) 淼南渡之焉如 淼べふとして南渡して焉くにか如かん
(39) 曾不知夏之爲丘兮 曾ち夏の丘と爲るを知らず
(40) 孰兩東門之可蕪 孰なんぞ兩東門を蕪すべけん

〔通釋〕

ああ、わがたましいの都に帰りがることよ、どうしてしばらくも都に戻ろうとすることを忘れようか。夏浦を後ろに西のかたを思いつつ、なつかしき郢の都の日々に遠ざかるのを悲しむ。高い堤防に登り立ち、遠くかなたを望み見て、しばらくはわが憂いの心をなぐさめる。しかし広々とした豊かな土地を目にするにつけ、またこの揚子江沿いの地方に残されている良俗を思うにつけ、悲哀の情のみが心にせまる。遼陽に向かつて進むが、一体どこに至るのであろう。水は広広として限りなく、南へ渡ってどこに行ったらよいのか。君は讒佞の臣に蔽われて、宮殿の廢墟と化することを知らない。どうして都の二つの東門を荒廢させてよかるうか。

〔洪興祖補注〕

(29) 〈羌靈寘之欲歸兮〉

精神夢遊、還故居也。羌、一作暎。

〔補曰〕羌、發聲也。嗟、丘亮切。於義不通。

〔訓讀文〕

精神夢に遊びて、故居に還るなり。羌、一に嗟に作る。

〔補に曰く〕羌は、發聲なり。嗟は、丘亮の切。義に於いて通ぜず、と。

〔語釋〕

○精神夢遊——肉体から離れた魂が彷徨うこと。藤野岩友博士『漢詩大系3』「招魂」の箇所に詳しい。○嗟——声が絶えるほど泣き極まること。なお、「義に於いて通ぜず」（於義不通）とあることから「羌」では意味が通じない。

〔30〕〈何須臾而忘反〉

倚住顧望、常欲去也。

〔訓讀文〕

倚住顧望して、常に去かんと欲するなり。

〔語釋〕

○倚住——立ち止まること。○顧望——ここでは郢都を振り返り眺める。

〔31〕〈背夏浦而西思兮〉

背水嚮家、念親屬也。

〔訓讀文〕

水を背にして家に嚮ひて、親屬を念ふなり。

〔語釋〕

○背水——「水」はここでは夏浦を指す。○念親屬——「念」は懐かしむの意、ここでは故国のことを懐かしく思っていること。

(32) 〈哀故都之日遠〉

遠離郢都、何遼遼也。

〔訓讀文〕

遠く郢都を離れ、何ぞ遼遼たるや。

〔語釋〕

○遼遼——遙か彼方遠いこと。

(33) 〈登大墳以遠望兮〉

想見宮闕與廊廟也。水中高者爲墳。詩曰、遵彼汝墳。

〔訓讀文〕

宮闕と廊廟とを想見するなり。水中の高き者を墳と爲す。詩に曰く、彼の汝墳に遵ふ、と。

〔語釋〕

○想見宮闕與廊廟——郢都のことを追想して思い浮かべること。○詩曰——『毛詩正義』(十三經注疏) 国風周南卷第一「汝墳」に同文あり。

(34) 〈聊以舒吾憂心〉

且展我情、溌憂思也。

〔訓讀文〕

且く我が情を展べ、憂思を溌らすなり。

〔語釋〕

○展我情——眺めながら憂い広がること。○溌憂思——憂いを溌らして発散させること。

(35) 〈哀州土之平樂兮〉

閔惜鄉邑之饒富也。

〔補曰〕 樂音洛。

〔訓讀文〕

郷邑の饒富なるを閔惜するなり。

〔補に曰く〕 樂、音洛、と。

〔語釋〕

○饒富——邑郷が賑わい富んでいること。○閔惜——ここではあわれみ惜しむこと。

(36) 〈悲江介之遺風〉

遠涉大川、民俗異也。介、一作界。

〔補曰〕薛君韓詩章句曰、介、界也。曹子建詩云、江介多悲風。注云、介、間也。

〔訓讀文〕

遠く大川を涉り、民俗異なれり。介、一に界に作るなり。

〔補に曰く〕薛君韓詩章句に曰く、介は、界なり、と。曹子建の詩に云ふ、江介悲風多し、と。注に云ふ、介は、間なり、と。

〔語釋〕

○曹子建詩云——『六臣注文選』（日本足利學校藏宋刊明州本）卷二十九「雜詩上」に同文あり。○注云——『六臣注文選』（日本足利學校藏宋刊明州本）卷二十九「雜詩上」の劉良の注に同文あり。○薛君韓詩章句曰——薛漢の韓詩章句のこと。『六臣注文選』（日本足利學校藏宋刊明州本）卷六「左太沖魏都賦」李善の注に同文あり。

(37) 〈當陵陽之焉至兮〉

意欲騰馳、道安極也。陵、一作凌。

〔補曰〕前漢、丹陽郡有陵陽、仙人陵陽子明所居也。大人賦云、反大壹而從陵陽。

〔訓讀文〕

騰馳たふちせんと意欲するに、道安くにか極いたらんや。陵は、一に凌に作る。

〔補に曰く〕前漢、丹陽郡に陵陽有り、仙人の陵陽子明の居る所なり。大人賦に云ふ、大壹に反りて陵陽に従ふ、と。

〔語釋〕

○騰馳——騎乗し上り馳せる、越えるの意。○丹陽郡——『漢書』（點校本二十四史）卷二十八上地理志に「丹揚郡、故と鄣郡なり。江都に屬す。武帝の元封二年、名を丹揚に更む。（丹揚郡、故鄣郡。屬江都。武帝元封二年更名丹揚。）」とある。なお、同書では「陽」を「揚」に作る。○大人賦云——『漢書』（點校本二十四史）卷五十七「司馬相如伝第二十七下」に同文あり。

〔38〕〈森南渡之焉如〉

森滉彌望、無際極也。渡、一作度。一云、森瀼彌望、無棲集也。

〔訓讀文〕

森滉彌望すれども、際極無し。渡、一に度に作る。一に云ふ、森瀼彌望すれども、棲集無きなり。

〔語釋〕

○森滉彌望——水の広々とした様を見渡すこと。

〔39〕〈曾不知夏之爲丘兮〉

夏、大殿也。丘、墟也。詩云、於我乎夏屋渠渠。懷王信用讒佞、國將危亡。曾不知其所居宮殿當爲墟也。

〔補曰〕夏、大屋。楊子曰、震風凌雨、然後知夏屋之爲𦉳𦉳也。

〔訓讀文〕

夏は、大殿なり。丘は、墟なり。詩に云ふ、我に於けるや夏屋 渠渠たり、と。懷王は讒佞を信用し、國將に危亡せんとす。曾ち其の居る所の宮殿 當に墟と爲るべきを知らざるなり。

〔補に曰く〕夏は、大屋なり。楊子曰く、震風凌雨ありて、然る後に夏屋の𦉳𦉳と爲るを知るなり。

〔語釋〕

○詩云——『毛詩正義』(十三經注疏) 秦風 卷第六「權輿」に同文あり。○楊子曰——『揚子法言』(新編諸子集成)「吾子篇」に同書では「凌」を「陵」に作る。○𦉳𦉳——ここでは屋敷がとぼりで覆われているように雨風を凌ぐこと。

(40) 〈孰兩東門之可蕪〉

孰、誰也。蕪、逋也。言郢城兩東門、非先王所作邪。何可使逋廢而無路。

〔補曰〕說文曰、蕪、蕪也。

〔訓讀文〕

孰は、誰なり。蕪は、逋なり。言ふところは、郢城の兩東門、先王の作る所に非ず。何ぞ逋廢して路無からしむべけんや。
〔補に曰く〕說文に曰く、蕪は、蕪なり。

〔語釋〕

○逋廢——說文曰——『說文解字』(四部叢刊本) 卷一下「艸部」に同文あり。

〔本文〕

(41) 心不怡之長久兮

心怡たのしまざること長久にして

(42) 憂與憂其相接

憂うれひと憂ひと其れ相接す

(43) 惟郢路之遼遠兮

惟えいれ郢路の遼遠なる

(44) 江與夏之不可涉

江と夏と渉るべからず

(45) 忽若不信兮

忽若として信ぜられず

(46) 至今九年而不復

今に至る九年にして復らず

(47) 慘鬱鬱而不通兮

慘あたて鬱鬱として通ぜず

(48) 蹇侘傺而含感

蹇あたて侘傺うれひして感うれひを含む

(49) 外承歡之洵約兮

外ぐわい歡あんを承くるの洵約たる

(50) 諶荏弱而難持

諶まご荏弱しんじやくにして進むを難し

(51) 忠湛湛而願進兮

忠たん湛たんとして進むを願ふも

(52) 妬被離而鄣之

妬と被離ひりとして之を鄣ふさぐ

〔通釋〕

私の心の楽しまないことは、まことに久しく、憂いと愁いとが絶え間なく続く。ああ、郢都への道ははるかに遠く、揚子江と夏水とを渡り行くことができない。忽然と郢の都を去り、信賴を失つたまま、今に至るまで九年の間帰れずにいる。心はいたみふさがり、晴れることもなく、ああ、しょんぼりと立ち止まって憂いを内に込めている。佞臣がうわべで君に気に入られるように美しそうに見せれば、君はそれにだまされてまことに弱弱しく、自分自身を支えることさえむずかしい。忠直の臣がはじめに進んで用いられようと願つても、佞臣の嫉妬が盛んにこれを邪魔する。

〔洪興祖補注〕

(41) 〈心不怡之長久兮〉

怡、樂貌也。

〔訓讀文〕

怡は、楽しむ貌なり

〔語釋〕

なし。

(42) 〈憂與愁其相接〉

接、續也。言己念楚國將墟、心常含戚、憂愁想續、無有解也。其、一作之。

〔訓讀文〕

接は、續なり。言ふところは、己れ楚國の將に墟せんとするを念ひ、心常に戚ひを含み、憂愁相續きて、解すること有る無きなり。其、一に之に作る。

〔語釋〕

○楚國將墟——楚が荒れ果てていく様。○含戚——憂い傷つくこと。

○憂與愁——「愁」は『楚辭補注』（四部叢刊初版）に記載されているが、『楚辭集注』においては「憂」と記載されている。

(43) 〈惟郢路之遼遠兮〉

楚道透迤、山谷隘也。

〔訓讀文〕

楚道透迤、として山谷隘なり。

〔語釋〕

○透迤——長遠なさま。○山谷隘——道が狭く険しいさま。

(44) 〈江與夏之不可涉〉

分隔兩水、無以渡也。

〔訓讀文〕

兩水に分隔せられて、以て渡ること無きなり。

〔語釋〕

○分隔兩水——兩水は揚子江と夏水のこと。分隔は分け離れること。

(45) 〈忽若不信兮〉

始從細微、遂見疑也。一本若下有去字。

〔訓讀文〕

始め細微より、遂に疑はるるなり。一本若の下に去の字有り。

〔語釋〕

(46) 〈至今九年而不復〉

放且九歳、君不覺也。

〔補曰〕卜居言、屈原既放三年、不得復見。此云至今九年而不復。按、楚世家・屈原傳・六國世表・劉向新序云、秦欲吞滅諸侯、屈原爲楚東使於齊、以結強黨。秦國患之、使張儀之楚、賂貴臣上官大夫・靳尚之屬及令尹子蘭・司馬子椒、内賂夫人鄭袖、共譖屈原。屈原遂放於外、乃作離騷。當懷王之十六年、張儀相楚。十八年、楚囚張儀、復釋去之。是時、屈平既疏、不復在位。懷王悔不用屈原之策、於是復用屈原。屈原諫懷王曰、何不殺張儀。懷王使人追之不及。三十年、秦昭王欲與懷王會、屈平曰、不如無行。懷王卒行。當頃襄王之三年、懷王卒於秦。頃襄聽讒、復放屈原。以此考之、屈平在懷王之世被絀復用。至頃襄即位、遂放於江南耳。其云既放三年、謂被放之初。又云九年而不復、蓋作此時、放已九年也。

〔訓讀文〕

放たれて且に九年にならんとするも、君覺らざるなり。

〔補に曰く〕卜居に言ふ、屈原既に放たれて三年、復たと見ゆるを得ず、と。此に云ふ、今に至る九年にして復らず、と。按ずるに、楚世家・屈原傳・六國世表・劉向の新序に云ふ、秦諸侯を吞滅せんと欲す。屈原楚の爲に東のかた齊に使ひし、以て強黨を結ぶ。秦國之を患へ、張儀をして楚に之かしめ、貴臣上官大夫・靳尚の屬・及び令尹子蘭、司馬子椒に賂し、内は夫人鄭袖に賂ひ、共に屈原を讒せしむ。屈原遂に外に放たれ、乃ち離騷を作る。懷王之十六年に當たり、張儀は楚に相たり。十八年、楚張儀を囚ふるも、復た釋して之を去らしむ。是の時、屈平既に疏んぜられ、復たと位に在らず。懷王

屈原の策を用ひざるを悔い、是に於いて復た屈原を用ふ。屈原、懷王を諫めて曰はく、何ぞ張儀を殺さざる、と。懷王人をして之を追はしむるも及ばず。三十年、秦の昭王、懷王と會せんと欲す。屈平曰はく、行くこと無きに如かず、と。懷王卒に行く。頃襄王の三年に當たり、懷王、秦に卒す。頃襄、讒を聽き、復た屈原を放つ。此を以て之を考ふるに、屈平は懷王の世に在りて細しりぞけられ復た用ひらる。頃襄の即位するに至り、遂に江南に放たるのみ。其の既に放たれて三年と云ふは、放たるの初めを謂ふ。又九年にして復らずと云ふは、蓋し此を作りし時、放たれて已に九年ならん、と。

〔語釋〕

○卜居言——洪興祖『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷六「卜居章句第六離騷」に「屈原既に放たれて三年遠く郢都より出づ、山林に処なり。復た見ゆるを得ず（屈原既放、三年遠出郢都、処山林也。不得復見。」とある。此云至今九年而不復は涉江に「今に至りて九年にして復らず（至今九年而不復。）」と記載されている。○楚世家——『史記』（點校本二十四史）卷四十一「楚世家」において秦が諸国を侵略してゆく記述がある。○屈原傳——『史記』（點校本二十四史）卷八十四「屈原賈生列傳」において張儀に関する記載が有り、その撮要。○六國世表——『史記』（點校本二十四史）卷十五「六國年表」において年表が載せられており、秦の他国への侵略に関する記載がまとめられる。○劉向新序——『新序校釋』（新編諸子集成續編）卷第七「節士」に「屈原は、名を平、楚の同姓に大夫あり。博通の知、清潔の行有りて、懷王之を用ふ。秦諸侯を吞滅して、並びに天下を兼ねんと欲す。屈原、楚の爲に東の齊に使ひし、以て強黨を結ぶ。秦國之を思へ、張儀をして楚にゆかしめ、楚の貴臣上官大夫、靳尚の屬に貨ひ、上に及びては令子蘭、司馬子椒、内は夫人鄭袖に賂ひ、共に屈原を譖せしむ。屈原、遂に外に放たれ、乃ち離騷を作る。（屈原者、名平、楚之同姓大夫。有博通之知、清潔之行、懷王用之。秦欲吞滅諸侯、并兼天下。屈原爲楚東使於齊、以結強黨。秦國患之、使張儀之楚、貨楚貴臣上官大夫靳尚之屬、上及令子蘭、司馬子椒。内賂夫人鄭袖、共譖屈原。屈原遂放於外、乃作離騷。」とある。

〔47〕〈慘鬱鬱而不通兮〉

中心憂滿、慮閉塞也。通、一作開。

〔訓讀文〕

中心憂滿し、慮り閉塞するなり。通は、一に開に作る。

〔48〕〈蹇侘僚而含感〉

悵然住立、内結毒也。

〔訓讀文〕

悵然として住まり立ちて、内に結毒するなり。

〔語釋〕

○悵然住立、内結毒——悵然は志を失つた状態。内は含、結はむすぼれる、毒は憂。また別読で、毒を内結するなり、とも訓読できる。

〔49〕〈外承歡之洵約兮〉

洵約、好貌。

〔補曰〕洵音綽。

〔訓讀文〕

洵約は、好みめよき貌。

〔補に曰く〕洵、音は綽。

〔語釋〕

○洵約——美好のさま。

〔50〕〔謹在弱而難持〕

謹、誠也。言佞人承君歡顏、好其諂言、令之洵約然、小人誠難扶持之也。

〔補曰〕謹音忱、信也。在音稔。語曰、色厲而内在。

〔訓讀文〕

謹は、誠なり。言ふところは、佞人君の歡顔を承けて、其の諂言を好みて、之をして洵約然たらしむるなり。小人誠に之を扶持し難きなり。

〔補に曰く〕謹、音は忱、信なり、在、音は稔。語に曰はく、色厲（はげ）しく内在（やわらか）なり、と

〔語釋〕

○佞人——口が達者で人にへつらう者。口先がうまくて心のねじけた人。○諂言——へつらう言葉。○扶持——助け支えること。○語曰——『論語注疏』（十三經注疏）「陽貨第十七」に同文あり。

(51) 〈忠湛湛而願進兮〉

湛湛、重厚貌。

〔補曰〕詩曰、湛湛露斯。注云、湛湛、茂盛貌。丈減切。相如賦云、紛湛湛其差錯。注云、湛湛、積厚之貌。徒感切。

〔訓讀文〕

湛湛は、重厚なる貌。

〔補に曰く〕詩に曰く、湛湛露、と。注に云ふ、湛湛は、茂盛の貌。丈減の切、と。相如の賦に云ふ、紛湛湛として其れ差錯す、と。注に云ふ、湛湛は、積厚の貌。徒感の切、と。

〔語釋〕

○詩曰——『毛詩正義』（十三經注疏）「小雅」卷十之一「湛露」に同文有り。また「注云」については、毛傳に「湛湛とは、露の茂盛する貌なり（湛湛、露茂盛貌）」とある。○相如賦云——『漢書』（點校本二十四史）卷五十七下「司馬相如傳第二十七下」に「紛湛湛として其れ差錯す（紛湛湛其差錯兮）」とある。また「注云」については顔師古の注に同文が確認できらる。

(52) 〈妬被離而鄣之〉

言己體性重厚、而欲願進、讒人妬害、加被離析、鄣而蔽之。被、一作披。

〔補曰〕被、讀曰披。反離騷曰、亡春風之被離。鄣音章、壅也。記曰、鉞鄣洪水。

〔訓讀文〕

言ふところは、己れの體性重厚にして、進むを願はんと欲す。讒人妬害し、被離として析するを加ふるも、鄣さへぎりて之を蔽ふ。

被は、一に披に作る。

〔補に曰く〕被は、讀んで披と曰ふ。反離騷に曰く、春の風の被離たる亡なくんば。鄣、音は章、壅ふさぐなり。記に曰く、鮌洪水を鄣ぐ、と。

〔語釋〕

○反離騷曰——『漢書』（點校本二十四史）卷八十七上「揚雄傳第五十七上」に「春風の被離たる亡し、孰か竜の処る所を知らん（亡春風の被離兮、孰焉知竜之所処）」とある。○記曰——『禮記注疏』（十三經注疏）卷第四十六「祭法第二十三」に「鯀は鴻水を鄣ぎて殛死す（鯀鄣鴻水而殛死）」とある。

〔本文〕

- (53) 堯舜之抗行兮 堯舜の抗行なる
(54) 瞭查杳而薄天 瞭查杳として天に薄せまる
(55) 衆讒人之嫉妬兮 衆たる讒人の嫉妬する
(56) 被以不慈之僞名 被らしむるに不慈の僞名を以てす
(57) 憎愠倫之脩美兮 愠倫の脩美を憎み
(58) 好夫人之忼慨 夫の人の忼慨を好よみす
(59) 衆踐蹠而日進兮 衆は踐蹠として日に進み
(60) 美超遠而逾邁 美は超遠して逾邁す
(61) 亂曰曼余日以流觀兮 亂に曰く、余が目を曼とほくして以て流觀し
(62) 冀壹反之何時 壹たび反らんことを冀へども何れの時ぞ

(63) 鳥飛反故郷兮

鳥は飛びて故郷に反り

(64) 狐死必首丘

狐は死して必ず丘に首すかしら

(65) 信非吾罪而棄逐兮

信に吾が罪に非ずして棄逐せらる

(66) 何日夜而忘之

何ぞ日夜にして之を忘れん

〔通釋〕

あの聖天子堯・舜の高尚な行為は、明瞭で遠く天にまで届くほどであったのに、多くの讒人どもは嫉妬して、堯・舜に対し、慈愛の心がないといういつわりの名をかぶせた。(まして、われらの如き者に対してはなおさらである。)君は、心が深く聡明な忠臣の美しい行為を憎み、あの讒佞の人々の忠義顔にいきどおりなげくのを好む。それで、讒佞の小人達は日々に君側に進出し、すぐれた人物は遠ざかってしまう。

結びの辞にいう、わが目を遠く遙かにして眺めわたし、一たびなつかしい都に帰りたいと願うが、一体、いつのことであろうか。鳥は飛んで故郷に帰り、狐は死ぬ時必ず自分の生まれた丘の方に頭を向けて臥すという。まして、わたくしは、本当に自分の罪でもないのに追放されたのだ。どうして日夜、故郷の郢都を忘れることができよう。

〔洪興祖補注〕

(53) 〈堯舜之抗行兮〉

行、下孟切。

〔訓讀文〕

行、下孟の切。

〔語釋〕

○抗行——立派な行い。

〔54〕〈瞭杳杳而薄天〉

一無瞭字。一云杳冥冥而薄天。

〔補曰〕瞭、音了、目明也。杳杳、遠貌。

〔訓讀文〕

一に瞭字無し。一に云ふ、杳冥冥として天に薄る。

〔補に曰く〕瞭、音は了、目明らかなり。杳杳は、遠き貌なり、と。

〔語釋〕

○目名——はっきりと目で見て取れること。

〔55〕〔56〕〈衆讒人之嫉妬兮被以不慈之偽名〉

〔補曰〕堯・舜與賢而不與子、故有不慈之名。莊子曰、堯不慈、舜不孝。言此者、以明堯・舜大聖、猶不免讒謗、況餘人乎。

〔訓讀文〕

〔補に曰く〕堯・舜は賢に與へて子に與へず、故に不慈の名有り。莊子に曰く、堯は不慈、舜は不孝、と。此れを言ふ者、以て堯・舜は大聖なるも、猶ほ讒謗を免れず、況んや餘人をや、なるを明らかにす、と。

〔語釋〕

○堯・舜與賢而不與子——帝堯・帝舜は、実子ではなく、賢者に位を譲ったこと。禅讓。

○莊子曰——『莊子集解』（新編諸子集成）卷八「盜跖第二十九」に同文あり。

〔57〕〔憎愠愠之脩美兮〕

脩、一作修。

〔補曰〕愠、紆粉切。心所愠積也。脩、力允切、思求曉知謂之脩。

〔訓讀文〕

脩、一に修に作る。

〔補に曰く〕愠、紆粉の切。心に愠積する所なり。脩、力允の切、思求曉知する之を脩と謂ふ、と。

〔語釋〕

○愠——ここでは、蘊蓄があるさま。○脩——思慮深いさま。

〔58〕〔好夫人之忼慨〕

釋文作磕、苦蓋切。

〔補曰〕忼、苦朗切、忼慨、憤意。君子之愠愠、若可鄙者。小人之忼慨、若可喜者、惟明者能察之。

〔訓讀文〕

釋文は磕に作る、苦蓋の切。

〔補に曰く〕 怍、苦朗の切、怍慨、憤るの意。君子の愠愉、鄙しむべき者のごとし。小人の怍慨、喜ぶべき者のごとし、惟だ明なる者のみ能く之を察す、と。

〔語釋〕

○釋文——『楚辭釋文』のこと。佚書。『楚辭補注譯注稿(二)』(本文第五小段)、『國學院大學中國學會報』第三十五輯所収参照。○君子之愠愉、若可鄙者——君子の蘊蓄は、却つて卑しまれること。○小人之怍慨、若可喜者——小人の意氣盛んな様は、却つて喜ばれること。

(59) 衆蹀躞而日進兮

蹀、一作躞、一作蹀、一作慷慄。

〔補曰〕 蹀、思葉切。蹀音蹀。蹀蹀、行貌。

〔訓讀文〕

蹀、一に躞に作る、一に蹀に作る、一に慄慄に作る。

〔補に曰く〕 蹀、思葉の切。蹀音は蹀。蹀蹀、行くの貌なり、と。

(60) 美超遠而逾邁

此皆解於九辯之中。

〔訓讀文〕

此れ皆九辯の中に解す。

〔語釋〕

○此皆解於九辯之中——『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷第八「九辯章句第八」に「……愠愉の脩美を憎み、夫の人の慷慨を好みす。衆は蹀躞として日に進み、美は超遠して逾邁す……（……憎愠愉之脩美兮、好夫人之慷慨。衆蹀躞而日進兮、美超遠而逾邁……）」とあり、同文が確認できる。ただし、本篇では、「愷」字を「忼」字に作る。

〔61〕〈亂曰曼余日以流觀兮〉

曼、猶曼曼、遠貌。

〔補曰〕説文、曼、引也。音萬。

〔訓讀文〕

曼、猶ほ曼曼のごとし、遠き貌。

〔補に曰く〕説文に、曼は、引くなり。音は萬、と。

〔語釋〕

○説文——『説文解字注』（上海古籍出版社）三篇下「又部」に同文あり。

〔62〕〈冀壹反之何時〉

言己放遠、日以曼曼。周流觀視、意欲一還、知當何時也。

〔訓讀文〕

言ふところは、己れ遠きに放たれ、日に以て曼曼たり。周流して觀視し、一たび還らんと意欲するも、何れの時に當たるか

を知らん。

〔語釋〕

○周流觀視——天下をめぐつて旅して、遊覽する様。○意欲一還、知當何時也——一度、楚国への帰還を思ふも、それが一体いつになることか分からない様。

(63) 〈鳥飛反故郷兮〉

思故巢也。

〔補曰〕淮南云、鳥飛反郷、狐死首丘、各哀其所生。

〔訓讀文〕

故巢を思ふなり。

〔補に曰く〕淮南に云ふ、鳥飛びて郷に反り、狐死するとき丘に首し、各々其の生ずる所を哀しむ、と。

〔語釋〕

○淮南云——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷十七「説林訓」に「鳥飛びて郷に反り、兔走りて窟に歸り、狐死して丘に首し、寒將水を翔るは、各おの其の生まるる所を哀しめばなり（鳥飛反郷、兔走歸窟、狐死首丘、寒將翔水、各哀其所生）」とある。なお、高誘注に「哀は、猶ほ愛のごときなり（哀、猶愛也）」とある。

(64) 〈狐死必首丘〉

念舊居也。

〔補曰〕 記曰、樂、樂其所自生、禮不忘其本。古人有言曰、狐死正丘首、仁也。廣志曰、狐死首丘、豹死首山。

〔訓讀文〕

舊居を念ふなり。

〔補に曰く〕 記に曰く、樂は、其の自ら生まるる所を樂しみ、禮は其の本を忘れず。古人に言有りて曰く、狐は死するとき正しく丘に首するは、仁なり、と。廣志に曰く、狐は死するとき丘に首し、豹は死するとき山に首す、と。

〔語釋〕

○記曰——『禮記注疏』（十三經注疏）卷七「檀弓上」に同文あり。○廣志曰——未詳。

〔65〕 〈信非吾罪而棄逐兮〉

我以忠信而獲過也。

〔訓讀文〕

我忠信を以てするも過とがを獲るなり。

〔66〕 〈何日夜而忘之〉

晝夜念君、不遠離也。

〔訓讀文〕

晝夜君を念ひて、遠く離れざるなり。

〔語釋〕

○晝夜念君、不遠離也——晝となく夜となく、主君を思念して、その場から遠く離れることができない様。

〔訓讀文〕

哀郢

此章は言ふところは、己れ放たると雖も、心は楚國に在り、徘徊して去るに忍びず、讒諂に蔽はれ、君に見えんことを思へども得ず。故に太史公哀郢を讀みて其の志を悲しむなり。

〔本文〕

哀郢

此章言己雖被放、心在楚國、徘徊而不忍去、蔽於讒諂、思見君而不得。故太史公讀哀郢而悲其志也。

〔語釋〕

○心在楚國、徘徊而不忍去——楚國を憂うあまり、うろうろと彷徨つて、その場から立ち去ることができないでいる様。○蔽於讒諂、思見君而不得——讒言にあり、主君に媚び諂う倭臣らに阻害され、謁見しようと思つても叶わぬこと。○太史公讀哀郢而悲其志也——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に、「太史公曰く、余離騷・天問・招魂・哀郢を讀みて、其の志を悲しむ。長沙に適き、屈原の自ら沈める所の淵を觀て、未だ嘗て涕を垂れ、其の人と爲りを想見せずんばあらず。賈生の之を弔ふを見るに及び、又、怪しむ、屈原の彼の材を以て、諸侯に游ばば、何れの國に收容せられざらん、而るに自ら是のごとくならしむるを。服鳥賦を讀みて、死生を同じくして、去就を輕んじて、又、爽然として自ら失せり（太史公曰、余讀離騷・天問・招魂・哀郢、悲其志。適長沙、觀屈原所自沈淵、未嘗不垂涕、想見其爲人。及見賈生弔之、又怪屈原以彼其材、游諸侯、何國不容、而自令若是。讀服鳥賦、同死生、輕去就、又爽然自失矣）」とあ

る。

※「楚辭補注」譯注稿（三十五）に續く。

（本號擔當者：木村剛大・今瀬英一朗・名越健人・曹岳翔・山田耀）